



波都波流
鉄醬附初

書初

少彦初

初午

令和元年度第三回企画展

初づつと

初にまつわる
江戸時代の行事・風習

入場無料

令和2年

1月25日(日) ~ 3月8日(日)

開催時間) 午前9時15分から午後5時

期間中無休



独立行政法人
国立公文書館
NATIONAL ARCHIVES OF JAPAN

〒102-0091 東京都千代田区北の丸公園3-2
TEL.03(3214)0621 <http://www.archives.go.jp>

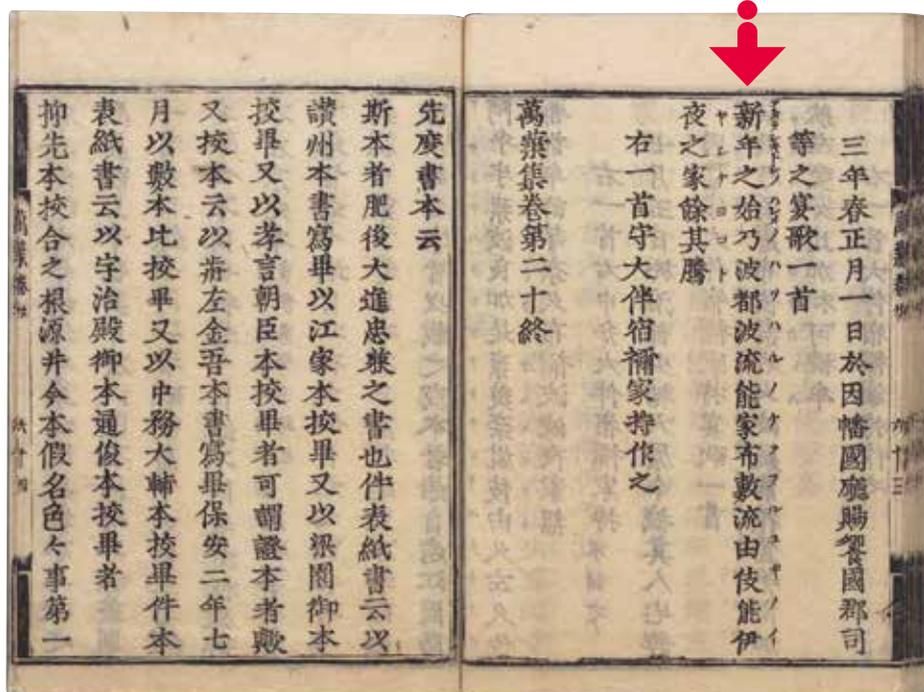
初づくし 初にまつわる江戸時代の行事・風習

お正月の初詣や書き初め、また、お食い初めや初午^{はつま}など、日本人の生活には「初」にまつわる行事・風習が多く存在しています。これらに加えて、江戸時代には謡初^{うたいぞめ}などの幕府・朝廷の行事をはじめとして、現代には見られない行事・風習もありました。新元号になって「初」の年明けを迎えて開催する本展では、江戸時代の「初」にまつわる資料をご紹介します。

I 1月と「初」

1月は1年のはじめの月です。そのため、1月には「1年の中の初」に着目したものをはじめとして、「初〇〇」や「〇〇初め」と呼ばれる行事・風習が数多くあります。ここでは、1月の「初」にまつわる行事・風習をご紹介します。

～元日の宴～ 万葉集^{まんようしゅう}



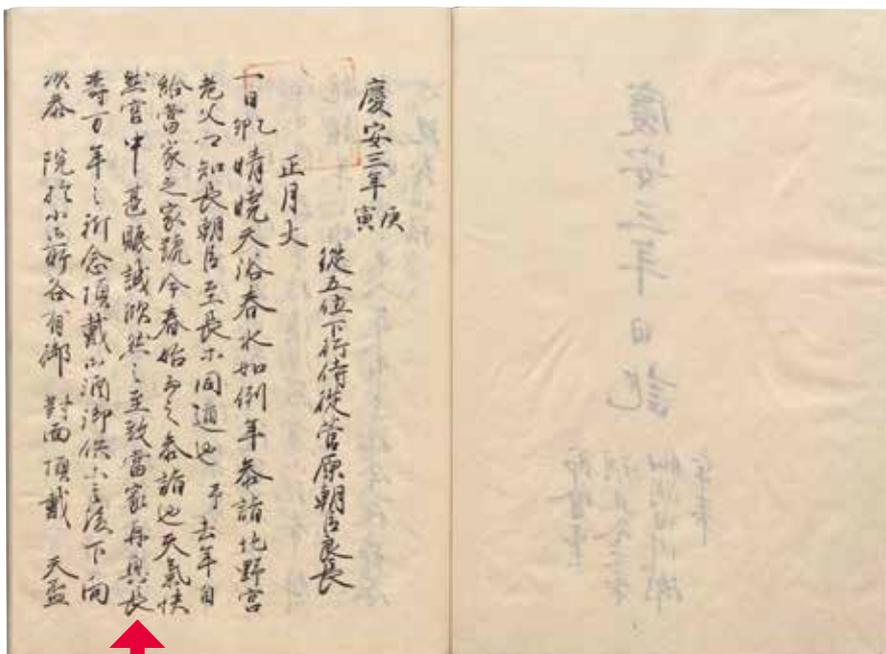
「新年之始乃波都波流能家布敷流由伎能伊夜之家餘其騰（新しき年の初めの初春^{けふ}の今日降る雪のいやしけ^{よごと}吉事）」。天平宝字3年（759）の元日、当時国司として因幡国（鳥取県東部）に赴任していた大伴家持が国庁で催された郡司らとの宴の席で詠んだ歌です。この宴は養老令に規定がある、元日の公式行事でした。家持は新年の雪が吉兆とされていたことをふまえ、「降り積もる雪のように、さらに良いことが重ならんことを」と歌っています。本資料は印刷された附訓本としては比較的初期のものである寛永20年（1643）版の『万葉集』です。紅葉山文庫旧蔵。

しよこくず え ねんじゅうぎょう じ たいせい
 ～お正月の風景～ 諸国図会年中行事大成



『諸国図会年中行事大成』に描かれた江戸時代のお正月の風景です。門松などで飾られた家の前で新年の挨拶が交わされています。その傍らでは、女性や子どもたちが羽子板に興じています。『諸国図会年中行事大成』は文化3年(1806)に刊行された、京都を中心に全国の神社の神事や祭祀、寺院の法会や開帳、さらには年中行事について、図を交えて解説した資料。絵は同時代に多くの読本や地誌などの挿絵を描いた速水春暁(春暁齋)によるものです。

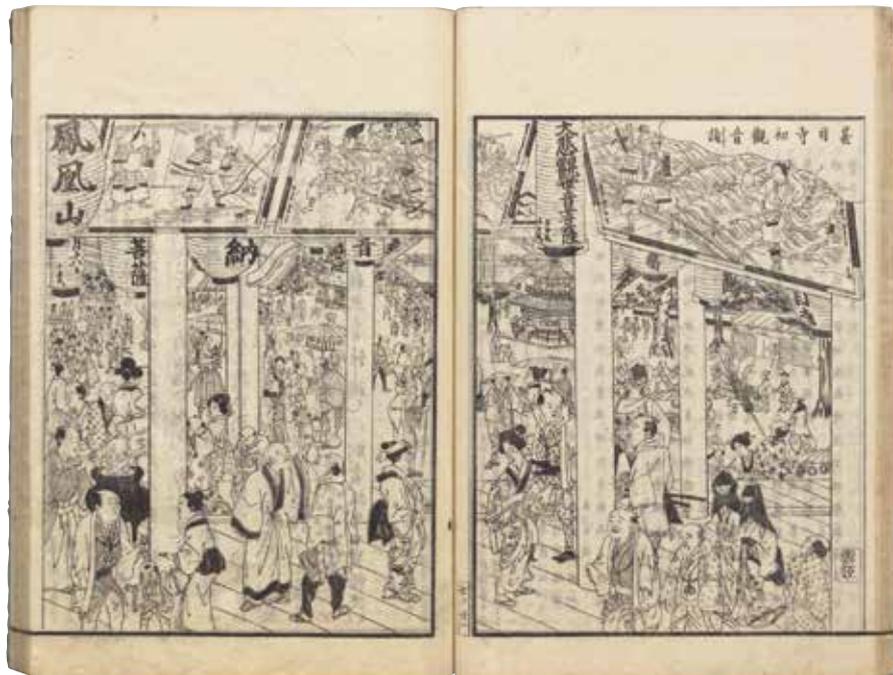
とよながきょうにつ き
 ～元日の寺社参詣～ 豊長卿日記



初詣と称してお正月に寺社を参詣するのは現代でも広く行われている習慣です。慶安3年(1650)の元日、公家の高辻良長(のちの豊長)は実兄東坊城知長(のちの恒長)らと北野天満宮へ参詣し、「当家再興、長寿万年」の祈念をしました。『豊長卿日記』の元日の記事には同様の記述が多くあり、高辻家、東坊城家といった菅原道真の子孫にあたる家々の者たちが、道真の祀られている北野天満宮へ参詣することが恒例と

なっていることがわかります。『豊長卿日記』は高辻豊長の慶安2年～寛文8年(1668)の日記で、本資料は明治期に書き写されたものです。

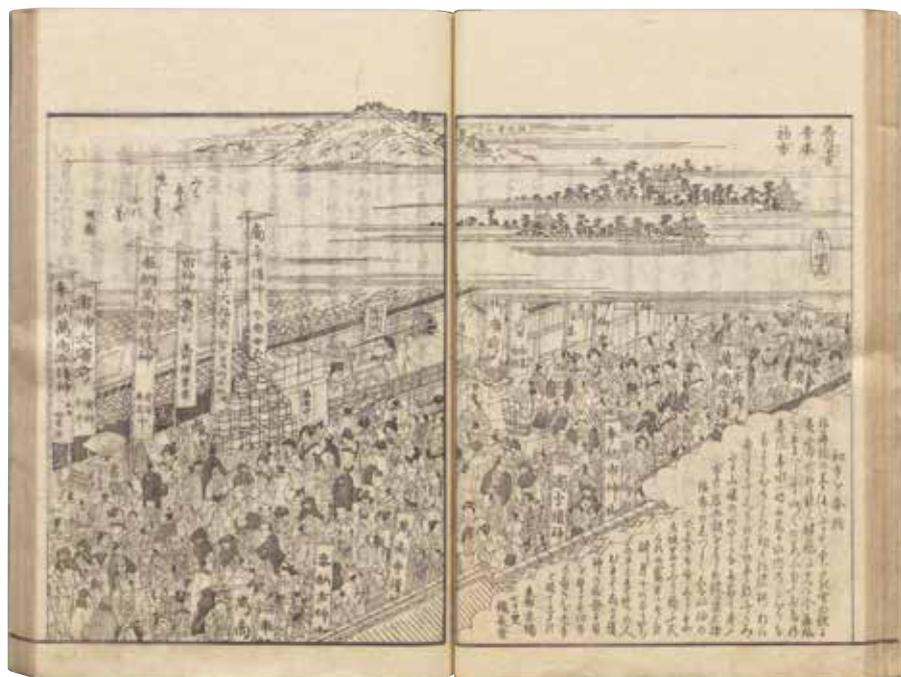
おわりめいしよ ず え
 ~新年最初の縁日~ 尾張名所図会



元日や三が日だけでなく、神仏ごとの縁日にあわせて寺社に参詣することも江戸時代には多くみられました。

たとえば、観音菩薩（かんぜおんぼさつ）の縁日は毎月18日です。『尾張名所図会』の「しむくじ甚目寺初観音詣」の図は、新年最初の観音菩薩の縁日である1月18日に参詣客で賑わう甚目寺（愛知県あま市）の様子を描いています。『尾張名所図会』は尾張国（愛知県西部）の名所・旧跡などを絵入りで解説した地誌です。天保15年（1844）刊行。

ぜんこう じ みちめいしよ ず え
 ~初市~ 善光寺道名所図会



現代でも初売をはじめとして、お正月のデパートや商店街は賑わいを見せます。江戸時代の信濃国（長野県）松本では1月11日に初市が開催されました。『善光寺道名所図会』の「松本初市」の図はこの日の賑わいを描いています。この初市は、今川氏や北条氏に塩の供給を止められ、領内の塩不足で苦しんでいた武田信玄に対して、上杉謙信から送られた塩が、1月11日に松本に届いた

ことを記念して、この日に初市が開催されるようになったともいわれています。『善光寺道名所図会』は善光寺詣を題材とした案内書で、洗馬宿（せば長野県塩尻市）から善光寺、善光寺から追分宿（おいわけ長野県北佐久郡軽井沢町）までの名所や寺社を紹介しています。嘉永2年（1849）刊行。

II 歳時記と「初」

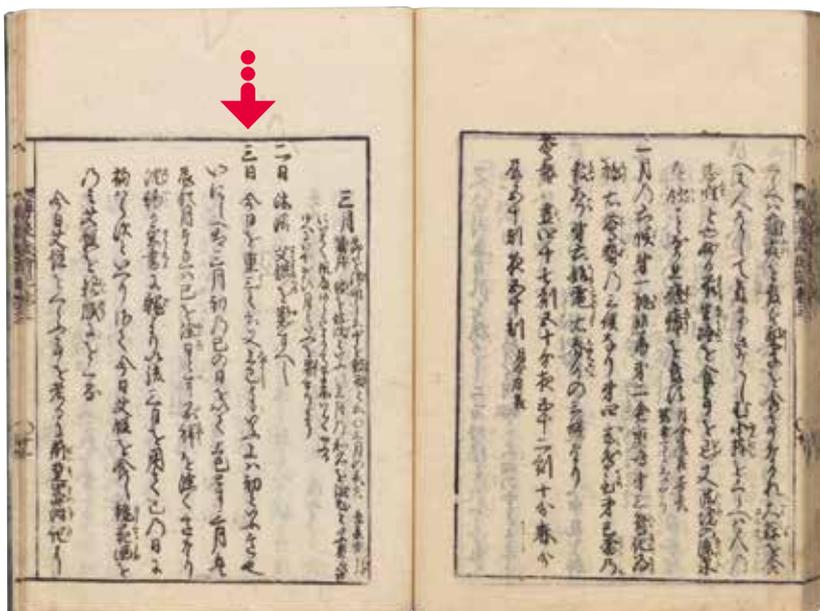
行事・風習のうち、季節ごとに行われるものや特定の時期に行われるものは2月以降に「1年の中の初」を迎えます。また、「1か月の中の初」に着目した行事・風習もあります。ここでは、春を中心に、2月以降の「初」にまつわる行事・風習をご紹介します。

はつうま みやこりんせんめいしょうず え ～初午～ 都林泉名勝図会



初午とは2月最初の午^{うま}の日のことで、この日、各地の稲荷社では祭礼が行われます。京都の伏見稲荷大社には、和銅4年(711)の2月初午の日に稲荷神が鎮座したと伝えられており、これにちなんで全国の稲荷社で2月初午の日が祭日となったともいわれています。『都林泉名勝図会』では初午の日の伏見稲荷の賑わいが描かれています。『都林泉名勝図会』は京都の名所や名園を図説した案内記です。寛政11年(1799)刊行。

じょうし にほんさいじき ～上巳の節句～ 日本歳時記



3月3日の節句は現在では桃の節句という呼び方が定着していますが、江戸時代には上巳の節句と呼ばれることが一般的でした。一見、「初」とは関わりがないようですが、上巳の「上」が「初」という意味で、もともと上巳は3月最初の巳^みの日を指す言葉でした。しかし、三国志で有名な魏の時代(3世紀中頃)以降は、巳の日にこだわらず、3月3日に行事が行われるようになったと記されています。『日本歳時記』は民間の行事を中心に

月日ごとの行事・風習を解説し、行事の由来や行事を題材とした詩歌を紹介している資料。貞享5年(1688)刊行で、本資料は天明2年(1782)に再版されたものです。

Ⅲ 幕府・朝廷の行事と「初」

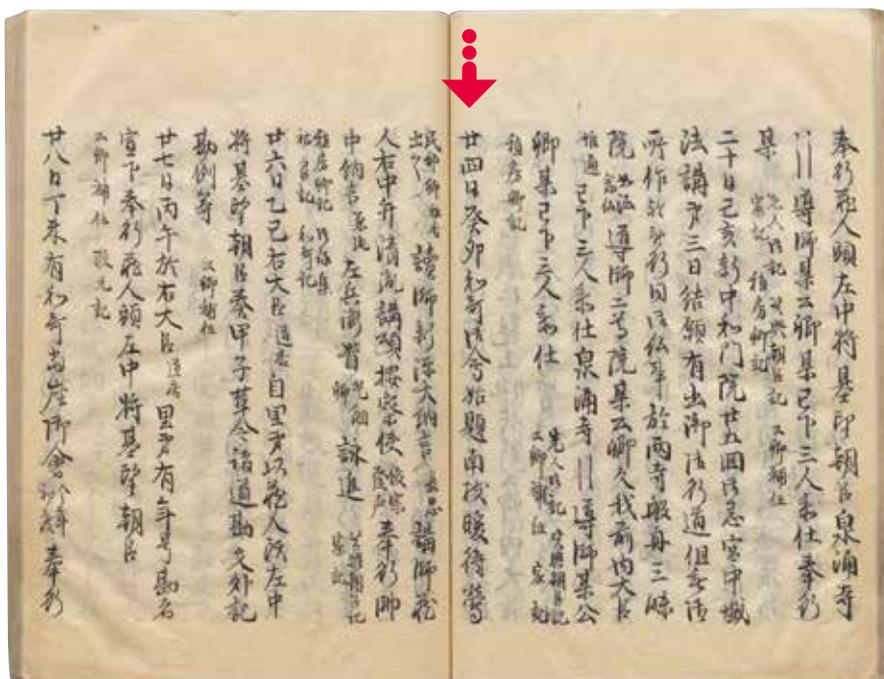
幕府や朝廷にも、恒例の行事として毎年催される儀式・儀礼や様々な節目で行われる行事がありました。こうした行事の中にも、「初」にまつわるものがあります。ここでは、幕府・朝廷の年中行事の中から、「初」にまつわる行事をご紹介します。

～謡初～ 安政四巳年正月三日御謡初御囃子組



幕府(江戸城)では、1月3日の夜に能役者を招き、謡曲のうたい始めをする謡初が催されました。江戸時代後期の謡初では、「老松」を観世太夫、「高砂」を喜多の家元が担当し、「東北」は金春・宝生・金剛の各太夫が輪番で担当しました。その後、三人の太夫・家元が「弓矢立合」を舞い、演じ終わると将軍や大名らが太夫・家元に肩衣(上半身に着用する袖無しの衣服)を脱いで与えました。この肩衣は後日、白銀などと交換されて太夫らの収益となりました。『安政四巳年正月三日御謡初御囃子組』は安政4年(1857)～6年の謡初における演目と担当を記録した資料です。

～御会始(歌会始)～ 続史愚抄



朝廷では1月24日(17世紀後期までは19日)頃、新年最初の天皇主催の歌会が催され、御会始と呼ばれていました。御会始は事前に題が発表され、その題に沿った歌を詠進するもので、現在毎年1月に行われている歌会始につながる行事です。『続史愚抄』は江戸時代中後期に公家の柳原紀光によって編纂された歴史書で、亀山天皇から後桃園天皇まで、天皇ごとに時代を区分し、朝廷の行事や神事仏事などについて記述しています。

Ⅳ 子どもの成長と「初」

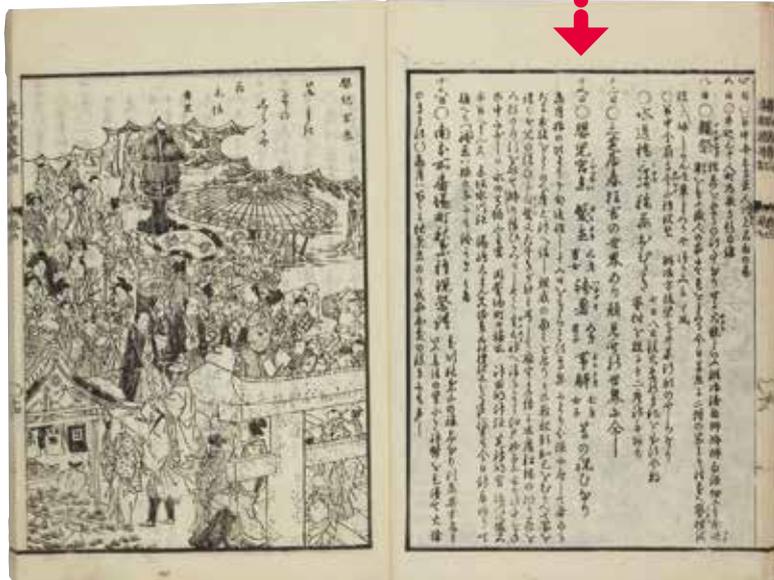
行事・風習の中には「一生の中の初」に着目したものもあります。ここでは、人生の節目節目に催される儀礼のうち、特に子どもの成長に関する「初」にまつわる行事・風習をご紹介します。

～お食い初め～ 礼方書



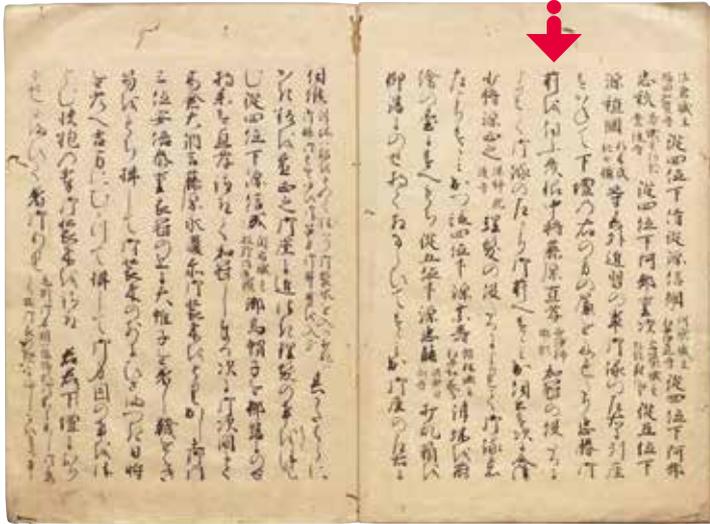
お食い初めは、初めて食べ物を食べさせる儀礼で、江戸時代には生後100日～120日頃に行われていました。『礼方書』の「喰初膳之図」に付された解説には、お食い初めではカナガシラ(金頭)という魚を用いるとあります。カナガシラは赤い外見のホウボウ科の魚で、子どもの祝い事で多く使われます。また、お祝いの席の定番である鯛や、立身出世のイメージにつながる鯉は汁に用いるとされています。『礼方書』は戦国時代の武将小笠原長時が小笠原流の礼法についてまとめた資料です。

～髪置・袴着・帯解(七五三)～ 江戸歳事記



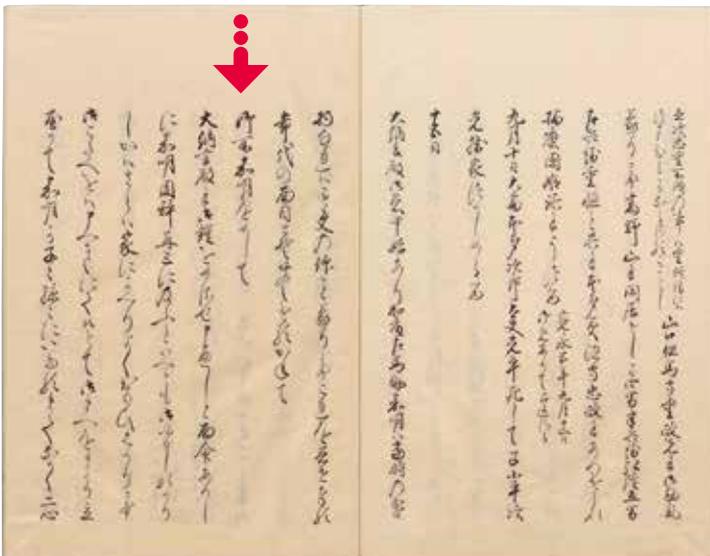
現在でも行われている七五三は、3歳の時、幼児が初めて髪をのばす髪置、5歳の時、幼児が初めて袴をつける袴着(着袴)、7歳の時、子どもが着物の付け紐をとり、初めて帯を結ぶ帯解(紐解)という3つの行事と関連していると言われています。『江戸歳事記』(『東都歳事記』)を見ると、少なくとも江戸時代後期から幕末頃の江戸では3歳の男児・女児、5歳の男児、7歳の女児が11月15日頃に神社などへお参りに出かけるという考え方が生まれていたことがわかります。『江戸歳事記』は天保9年(1838)刊で、江戸及び近郊の年中行事を挿絵入りで解説した資料です。

げんぶく ごげんぶくき
 ~元服~ 御元服記



広く知られている人生儀礼の一つに元服があります。初めて冠をつけるので、初冠と呼ばれることもあります。正保2年(1645)に元服したのちの4代将軍徳川家綱は、このとき数え年5歳で、冠をかぶらせる加冠役(かかん)に井伊直孝が、髪を整える理髪役(ほしなまさゆき)に保科正之が命じられました。これ以降、徳川将軍家における元服は、世子(せいし) (跡継ぎ)のお披露目という意味合いを持ち、数え年で5歳の時に行うことが通例となりました。『御元服記』は家綱元服の儀式について、細部にわたって記録した資料です。本資料は林羅山旧蔵。

よろい きぞめ ごじつ き
 ~鎧着初~ 御実紀



鎧着初(具足始)とは、武士の男子が初めて鎧を身につける儀式です。元和8年(1622)9月15日、のちの3代将軍徳川家光の鎧着初が行われました。このとき、家光に鎧を着させたのは、秀吉が柴田勝家と戦った賤ヶ岳の戦いで戦功をあげ、「賤ヶ岳七本槍」の一人に数えられた加藤嘉明でした。4代家綱以降の鎧着初では、多くは井伊氏が介添役を務めました。『御実紀』は通称「徳川実紀」と呼ばれる幕府の正史です。本資料は紅葉山文庫旧蔵。

ギャラリー・トークのお知らせ

企画展の見どころを
 企画者が解説します。

日時

1月29日(水) 午前11時から / 2月19日(水) 午後2時から / 3月4日(水) 午前11時から

※2月19日(水)は開催時間が異なりますので、ご注意ください。 ※所要時間30分程度 ※事前申込不要 ※1階展示場へお集まりください。

独立行政法人

国立公文書館
 NATIONAL ARCHIVES OF JAPAN

〒102-0091
 東京都千代田区北の丸公園3-2
 TEL.03 (3214) 0621

HP www.archives.go.jp



f @JPNatArchives

t @JPNatArchives

アクセス 東京メトロ東西線「竹橋駅」1b出口から徒歩5分